







2015年に韓国で劇場公開された映画「セシボン」は、1970年代のソウル中心街に実在した音楽喫茶「セシボン」を舞台にした青春映画だ。そのなかで、主人公が憧れの女子学生と相合傘をして歩くシーンがある。映画のために作られたセットは、いまでも噴水台を挟んで残る韓国銀行(旧朝鮮銀行)、新世界百貨店(旧三越百貨店)、ソウル中央郵便局(旧京城郵便局)の様子を再現し、ふたりは明洞(ミョンドン)あたりから美都波(ミドパ)百貨店までの短い道りをデートする。セットに再現された道筋はいまもそのままである。

郵便局はまっさらな高層ビルに建て替えられたが、韓国銀行と新世界百貨店は外形だけはいまも植民地期当時の姿を伝える。ただし、韓国銀行は貨幣博物館に転身し、新世界百貨店も内装を大幅に変えた。10年ほど前なら一步足を踏み入ると柔らかく曲がりくねった手すりの階段が三越を想起させ、何よりも正面玄関に座っていた三越独特のライオン像が撤去されて今は無い。

このほかソウル駅も東京駅と双子の外形をそのまま保ちながら美術博物館として再活用されているし、あまり目立たないが朝鮮電力や拓殖銀行の建物もソウル市中心部に現存する。時の風化によって消えてゆくものも多いだろうし、人が意識して遺そうと思う場合でさえ、何を遺し何を遺さないかの判断には常に整合的な理由があるとは限らない。1995年に旧朝鮮総督府の建物が爆破されたのは明らかに時の政権のパフォーマンスであった。植民地期の日本建築はほかにもあったのに朝鮮総督府の建物だけが爆破されて更地となり、いまもってそこは更地のままで観光名所景福宮前の広場となっている。

1908年日本人による西洋建築として竣工された大韓医院は、その中心的な建物が残る(1)。1910年から朝鮮総督府医院本館として、1928年からは京城帝国大学医学部付属病院として使用された。いまソウル大学校付属病院の豪壮な建物の裏手に医学博物館として活用される。1階は事務室ばかりで立ち入り禁止だが、もとは診療室・病室が両側に並んだ(8)。



2階にも診療室・病室があったが、いまはここに19世紀末以来の医学史の展示スペース(9)があり、時計台へ上がる階段も設えてある(6・12)。

朝鮮総督府医院時代の勤務経験者からの聞き取り*によると、勅任医官と院長だけが正面玄関を利用でき、それ以外は患者ともども別の入口から入ったという。また、上の病棟(2階?)は日本人が入り、下の病棟(1階?)には朝鮮人が入れられたという。そして、朝鮮人医師はどれほど腕が良くても下の病棟しか任せられず、上の病棟は日本人医師が担当したともいう。

*「未公開資料 朝鮮総督府関係者 録音記録(13) 京城帝国時代の回顧」(『東洋文化研究』14(2012年)学習院大学東洋文化研究所)

その正面玄関は3・7・11・13・14。「別の入口」がどれに当たるかわからず、博物館の専任教員(歴史学)と学芸員に尋ねてみたが、そんな話は初耳だと驚くばかりで場所の特定ができなかった。仮に横門だとすると4がそれにあたる。

一方、ソウル市中心部に遺るのが旧京城府庁(2)。1926年に竣工。1946年からはソウル市庁として使用され、新庁舎建設に際して旧庁舎の保存・廃棄で議論が割れた。結局、旧庁舎の前面部分をソウル市立図書館に転用し、後背地にガラス張りの新庁舎を建てた(5・15)。旧庁舎内は、1階が通常の図書室のほか、ソウル資料室、世界資料室などの特殊図書室が設置され、最上階(5階)には旧庁舎解体時に出てきた柱材・装飾品などの展示スペースが配置される。

さて、植民地期に遡るような民衆的建築物をソウル市内中心部で探し当てるのはなかなか難しい。10は日本建築ではないが1932年創業のドジョウ鍋店(湧金屋)の正面入口。ソウル市立図書館から徒歩5分圏内の食堂街に隠れている。木枠の引き戸で仕切られた店内は狭い。階段下の3人座ると身動きのままならない座敷で、昔からの畳だという韓国人と創業以来のまことに辛いドジョウ鍋をつついた。

(写真・弓倉智子、文・池内敏)





